

## 歴史叙述とエスニシティ：ウィリアム・スタイロン 『ナット・ターナーの告白』をめぐって

小谷， 耕二  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5529>

---

出版情報：言語文化論究. 18, pp. 53-61, 2003-06-25. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## 歴史叙述とエスニシティ

—— ウィリアム・スタイロン『ナット・ターナーの告白』をめぐる ——

小 谷 耕 二

William Styron の *The Confessions of Nat Turner* (1967) の出版は、公民権運動が生み出した時代状況もあってか、大きな論議を呼び起こした。『ナット・ターナーの告白』（以下、『告白』と略記）は、1831年にヴァージニア州サウスンプトン郡で起きた奴隷反乱を素材としたものであり、首謀者ナット・ターナーの一人称による回想・告白という体裁を取っていた。黒人70名ほどが関与し、50人あまりの白人が殺害されたこの反乱はそれ自体が衝撃的な事件であったが<sup>1)</sup>、それを白人作家スタイロンがナット・ターナーの「内面から」描こうとしたその大胆な試みをめぐる、毀誉褒貶が相次いだ。論議の焦点となったのは、事実とフィクションをめぐる問題であった。が、同時に、主として黒人作家や批評家の側から痛烈な批判が浴びせられ、論争は一面で人種対立の様相を呈するものとなっていた。本稿では、小説における史実とフィクションの関係、また歴史叙述とエスニシティといった点に関して、『告白』とそれをめぐる応酬から浮かびあがってくる問題点を整理しておきたい。

### I

まず出版後の書評を概観しておく。黒人の作家・批評家の側からの批判的論評については、*William Styron's Nat Turner: Ten Black Writers Respond* という論文集が1968年に出版され、現在そのリプリント版が出ている。そのなかの論考で Ernest Kaiser が当時の雑誌や新聞に掲載された書評を概観している。それらの書評の大部分は、いま現物を直接確認する用意がないので、カイザーに依拠して、その概略を見ておきたい。(Kaiser 58-65)

論壇の有名な主要雑誌の評価は総じて好意的である。*American Scholar*, *Time*, *Harper's*, *Partisan Review* 等が「ここ何年かで最高の小説」、「第一級の作品」、「奴隷制度を扱ったもっとも深遠な小説」といった賛辞を送り、*Wall Street Journal*, *New York Times*, *The Los Angeles Times* 等の新聞もそれに倣っている。書評の執筆者としては、C. Vann Woodward, Arthur Schlesinger, Jr., Philip Rahv, James Baldwin らの名前が目立つ。

一方、*The New Leader*, *Freedomways*, *Negro Digest* 等の黒人活動家系列の雑誌は批判的である。たとえば *The Worker* は、『告白』を「反黒人的でナット・ターナーを誹謗するもの」と評している。批判の焦点は、スタイロンのナット・ターナー像が白人の黒人に対するステレオタイプにもとづいており、歴史的に不正確であるという点であった。実際には妻がいたナット・ターナーが独身で、同性愛の性向をもち、白人女性に対して鬱屈とした抑圧

された情欲を抱いていたというスタイロンの性格造型は「嘘」であり、また、その反乱がアメリカ史上唯一の一貫した黒人奴隷反乱だという見方は史実に反する、といった具合である。この後者の論点は、*The Nation* や *Political Affairs* 誌上で Herbert Aptheker という歴史研究者が指摘した主張であった。(ちなみにスタイロンは、アプセカーの修士論文を借り出して、参考資料として精読している。) 黒人は決して奴隷制度の暴虐のもとで、唯々諾々とおとなしくしていたのではなく、ナットの反乱のほかにも奴隷反乱はあったし、自由を求めて戦う黒人は存在したのだ。こうしてスタイロンは史実を歪曲し、したがって「英雄的な」ナットの実像を捉えていない。いや、そもそも白人の作家が黒人奴隷の内面に迫ろうと試みること自体が、不遜な企てであり、もし黒人のように考え、リアルな黒人像を創造したいのであれば、黒人霊歌やブルースを歌うことができ、その生活の微妙な細部まで知悉していなければならない。おおむねこれが、カイザーの概観を通して浮かびあがってくる、スタイロンに対する批判者たちの言い分であったといえる。史実か否かという問題のみならず、白人に黒人が描けるのかという文学表現におけるエスニシティの問題までがかかわってくる批判であった。

## II

『ウィリアム・スタイロンのナット・ターナー 10人の黒人作家の応答』における批判も基本的にこの延長線上に位置している。上述の主張を裏付ける、あるいは敷衍する論点を、以下『応答』から少し抄録しておく。<sup>2)</sup>

### ①史実の歪曲や捏造について

- ・ナットには妻子があったことを無視している。(Bennett)
- ・ナットが主人から逃げ出した事実を無視。(Bennett)
- ・ナットの宗教的靈感や教えは両親、とくに祖母の影響だったことを無視している。(Harding)
- ・主人に忠実な黒人奴隷たちが敵対したために、反乱は最終的に失敗したという風に描かれている。これは「貴族的奴隷制度」の慈悲深い性格を際立たせようとする描き方で、史実に反する。(Thelwell)
- ・スタイロンは“*This Quiet Dust*”のなかで歴史家 Stanley M. Elkins の史観に依拠して、アメリカの奴隷制度はきわめて専制的かつ抑圧的であり、そのなかでは黒人は心理的に去勢されて、反乱は困難であり、Sambo 的存在にならざるを得なかった、という見方を示している。これは無知な誤解だ。(Kaiser)

### ②黒人に対するステレオタイプな見方、黒人の実像・現実に対する無理解について

- ・スタイロンは「サンボ」というステレオタイプを復活させようとしている。(Bennett)
- ・スタイロンはナットの成長期に影響を与えたのは白人ばかりだという描き方をしている。これは、何事かを成し遂げる黒人は、白人との交流を通してそうすることができるようになるのだという人種差別的見方を反映している。(Poussaint)
- ・スタイロンのナットは“house nigger”あるいは“Uncle Tom”として描かれている。黒人が反抗するのは、白人のようになりたいという心理的欲求が満たされないからであって、内的尊厳のためではないというステレオタイプな見方が、ここには現れている。

(Poussaint)

- ・白人女性に対するナットの性的欲望を極端に強調している。(Harding, Killens, Kaiser)
- ・黒人蔑視の表現が頻出する。(Kaiser)
- ・主人に媚びへつらう黒人像, 悪いことをして親に見つかった子供みたいに, 反乱の詳細を漏らしてしまう黒人という見方。(Kaiser)
- ・黒人は奴隷制度の中で満足していたという“happy darky”のステレオタイプ。(Hairston)
- ・野獣としての Will 像。(Thelwell)
- ・黒人の言語, イディオムを描いていない。(Killens)
- ・自由黒人を奴隷以上に苦境に陥っている存在として描いている。これが示唆するのは, 奴隷制度は必ずしもひどいものではないという暗黙の考え方だ。(Williams)

③作品の評価, その他について

- ・『告白』は, ナットの告白ではなく, スタイロンの「告白」になっている。(Bennett, Killens)
- ・白人の人種差別主義が知らず知らずのうちにスタイロンを捉えている。(Poussaint)
- ・公民権運動の中で示された自由を求めて戦う黒人のプロトタイプとしてのナット像を捉えていない。(Kaiser, Hamilton)

この抄録からもわかるとおり, 黒人の側からの批判は, スタイロンが史実を歪曲し, ナット・ターナーの内面を捏造し, そうすることで, 奴隷制度や黒人についてのスタイロン自身の隠れた先入観や偏見がはからずも露見し, 作品自体がスタイロンの内面の「告白」となっているというものであった。カイザーはこの小説を「芸術と政治, 芸術と社会学の乖離の不条理性を示す好例」と述べているが, それはいみじくも彼らの批評そのものに内在する問題点を露呈するものでもあった。つまり, 『告白』に対する好意的書評がその芸術性を高く評価したものであったのに対し, 『応答』は芸術性に着目する以前に, きわめて政治的な立場からなされた糾弾だったのである。そして公民権運動の高揚の熱気がいまだ冷めやらぬせいか, その論調は総じて激越で, ときにヒステリックですらあり, スタイロン擁護の立場からの反批判を必然的に招き寄せることになった。

### Ⅲ

『応答』の論者たちがスタイロンの史実の歪曲について論難したとき, 根拠としたのは Thomas R. Gray の手になる “The Text of The Confessions of Nat Turner” (以下, 『実録』と略記) という小冊子であった。グレイはナット・ターナーの弁護士で, 反乱鎮圧後捕えられたナットに獄中で接見し, 彼の告白を記録に留めて残した。そして, その間の事情を記した短い序文と, 反乱で殺された白人のリスト, および裁判にかけられた黒人とその所有者名, その判決の内容のリストを添えて出版した。それがこの冊子である。そこでは歴史上のナット・ターナー本人が事件の経緯やみずからの生涯について証言している。したがって事件の唯一の客観的な一次資料と考えられ, 『応答』の論者たちにとって反乱の真相を伝える拠り所とされた。

ところがこの『実録』そのものの政治性を問い直す見方が出てきた。『実録』の証言内容を額面どおりに受け取ってよいのかどうか, そこが問題となったのである。たとえば

Seymour L. Gross と Eileen Bender は、グレイの『実録』が奴隷制度擁護の狙いを隠しもったきわめて政治的な文書であることを指摘している。<sup>3)</sup> それによると、ナット・ターナーの言葉の忠実な記録といいながら、『実録』の言語は編集のプロセスのなかでグレイ自身のものとなっている。そしてグレイは、ナット・ターナーの反乱が特殊なケースであることを強調することによって奴隷暴動の噂をしずめ、人心の不安を取り除こうとした。さらにナットを狂信的人物として描き出すことで、一般に共感不可能、あるいは理解不可能な存在に仕立てあげ、その反乱を奴隷と主人の関係の構造から切り離す手段を読者に提供した。つまり、グレイにはこの反乱を契機に奴隷制度への問い直しが広がるのを封じ込める意図があったというのである。(Gross and Bender 492, 494)

こうしてグロスとベンダーはグレイの『実録』の客観的信頼度、そこに記録されたナット・ターナー本人の証言そのものにも一定の留保をつけた。そして現在ではどこまでが「事実」で、どこまでが「伝説」なのか腑分けするのは困難であるという前提に立って、その事実／伝説がその後の小説や歴史書のなかでどのように肉付けされ、神話化されていったかをつぶさに辿っている。グレイの文書が提示した「狂信的、動機なしの邪悪さ」(Gross and Bender 499)としてのナット像が敷衍され、定着する一方で、自由を求めて闘う黒人としてのナット像も伝説化されていった。グロスとベンダーによれば、スタイロンの『告白』もこうした神話的ナット・ターナー像の構築の系譜に位置づけられる作品なのである。そうした系譜の中では史実の歪曲という批判は無効化される。『応答』の論者たちが提示する「英雄」としてのナット像も、それを裏付ける客観的根拠はなく、したがってスタイロンのナット像と同様に想像力が描き出したものということになる。つまりは最小限の基本的事実関係の枠組みのなかに、両者ともそれぞれのものの見方や、願望や先入観にもとづいて、それぞれのナット・ターナー像を描き出しているのである。そこでは、正しいか間違っているかの政治的判断ではなく、どれだけ説得力のある映像が現出しているかという想像力の軌跡が問題となる。歴史ではなく、文学の次元の話になるのである。

#### IV

それではスタイロンはどのようなナット・ターナー像を描き出したのか。この点に関して注意すべきポイントは、①ナットはなぜ反乱を計画し、実行したのか、②反乱のなかで、ナット自身はたった一人の人物、しかも彼が好意を寄せていた白人少女 Margaret Whitehead だけしか殺さなかったが、それはなぜか、ということである。

①については、『実録』に見られるように狂信者の悪魔的所業として片付けるのではなく、スタイロンはナットの内面の深い孤独感を描きこんでいる。スタイロンの手になるナット像は、『応答』の論者たちがみずからの願望を投影した革命的反乱の指導者というよりも、弱さや自己矛盾や疑念によって幾重にも内面に亀裂を抱え込んだ人物である。彼は主人 Samuel Turner の一家から読み書きを教えてもらう。この能力は恩恵であると同時に、一種の呪いともなる。周りの黒人たちと自分とは違うという違和感や疎外感が生まれ、また一方で、呪うべき暮らしのなかでそれに抗う意志も力もない、「蠅のような」彼らのありように侮蔑感を抱くようになる。<sup>4)</sup> ただ単に奴隷制度の暴虐のなかで反乱への意志が生まれるというのではない。たしかに奴隷制度のせいで愛する友人 Willis との別離を強い

られ、またサミュエル・ターナーに結果的には裏切られ、ほかならぬサミュエル本人から植え付けられた将来の希望を奪い取られもする。そして奴隷として売られ、奴隷労働の過酷な生活を経験しもする。しかしそうしたことに対する怒りだけではなく、奴隷制度がナットの内面に種をまいた自己疎外も彼の反乱の大きな要因なのである。黒人たちに対する侮蔑は、自分もまた彼らと同様の「蠅のような」存在に甘んじているという点で、自分に跳ね返ってくる。その意味で、ナットは絶えず自分自身に抵触し、それゆえ、みずからが何の齟齬も感じることなくみずからと一体であるような満たされた至福は、彼には本質的に禁じられている。ナットの反乱は一面ではこのような自己疎外を一挙に解消しようとする企てでもあったと考えてよい。そのうえ、ナットの聖書の熟読は、旧約聖書の預言者たちとの同一視を招く。ナットはみずからを彼らになぞらえ、自己形成を図る。このことが怒りと復讐の反乱への道筋を用意するものであることはいうまでもない。つまり、こうした複雑な性格造型、現代人とも見まがうばかりの孤独感や自己疎外を軸に、スタイロンはナット・ターナー像を構築しているのである。

②に関しては、まずナットのセクシュアリティの問題に触れておく必要がある。これも英雄としてのナット像を冒瀆するものとして『応答』の論者たちから痛烈な批判を浴びた点であるが、スタイロンは、ナットを異性と性的経験をもたない、同性愛の性向のある人物として描いている。彼は空想のなかで白人女性の肢体を思い描きながら、あるいはウィリスとおたがいの体に触れ合いながら、自慰にふける。北部から訪れた白人女性の姿に異様な性的興奮を覚え、また断食の修行中には大きな宗教的高揚感のさなかに射精もする。このほかにも、スタイロンはナットに、サミュエル家の令嬢 Miss Emmelin と従兄との情交や、母親が奴隷監視人に凌辱される場面を目撃させている。作品の結末では刑場に引き出される前に、マーガレットとの交情を想像し、彼女が発する聖書についての言葉に喚起されて、宗教的法悦のうちに射精している。『告白』には、異様なまでに性にまつわるエピソードがあふれているといつてよい。

母親のレイプ目撃が、性と暴力あるいは性と権力関係を心に焼きつける心的外傷となつて、ナットの人格形成に影響を及ぼしたと考えることはもちろん可能である。そうしたフロイト的視点からの緻密な論文もある。<sup>5)</sup>しかし必ずしもフロイトの所説の細部との具体的な呼応関係を捜さずとも、スタイロンがセクシュアリティという角度からナット像を描き出そうとしていたことを確認しておけば、ここではひとまず十分である。ピューリタンの強度の性の抑圧は、逆に強度の性的昂揚に結びつくものであろうし、性と宗教的法悦はともに没我による至福において重なり合うことも容易に理解できる。存在すること自体に欠落を内在させた、あるいはひとつの欠損としてしか存在し得ないナットが、一時的にしろ性のうちに内面の亀裂の回復を求めるのも必然であるといえる。

ただこうした性と聖の深層心理をめぐる一般論だけでは、なぜナットの性的欲望の対象がマーガレットであり、またなぜそのほかならぬマーガレットを彼は殺害するに至ったのかという疑問に答えることにならないこともまた事実であろう。この点について、Ardner R. Cheshire, Jr. は、次の三つの理由を挙げている。(Cheshire 116)

- ① 反乱の手下たちに対するコントロールを維持するため。ウィルに血を流すか、首領の座を下りるかの選択を迫られ、反乱の成功がマーガレット殺害にかかっていると、ナットは判断した。

- ② マーガレットがナットに対して抱いていた、ほかならぬ同情のため。白人がナットに同情するとき、そこには白人の側の優越感にもとづいた力関係が付随している。マーガレットの同情は人間に対するものというよりも、傷ついた動物に対するようなものであり、ナットは人間としての誇りを逆に傷つけられた。
- ③ マーガレットが無邪気で、美しい白人少女だったから。南部の白人は、奴隷による南部女性への重大で不当な仕打ちは最大の犯罪と考えていたので、ナットがマーガレットを殺害したとき、それは象徴的次元では南部白人社会がもっとも大切にしているものを凌辱し、破壊する行為だった。

これらの理由は、いずれもそれなりに説得力を有するものである。とくに③は南部の特殊性に立脚する理由であり、一般論に欠けた視点を提供するものだといえる。

しかし先に見たナットの複雑な性格造型をここで考慮する必要がある。Samuel Coale は、ナットにとってマーガレットが白人と黒人の間の権力関係と反目を超越する一種のセンチメンタルな理想となっていたことを指摘している。(Coale 87-88) これが結末の二人の合一のヴィジョンにつながるわけだが、ただしコールはそのヴィジョンが作品の構造や主題上から成功しているかどうかについては、多少懐疑的である。(Coale 88, 98) いずれにせよ、マーガレット殺害が、奴隷制度とそれにもとづいた南部白人社会に対する象徴的凌辱と破壊である一方で、白人と黒人の敵対関係の相克をもそこに見て取ることが可能な多義性を秘めた行為である点を、注意しておくべきであろう。さらに言えば、孤独と自己疎外に刺し貫かれたナットにとって、マーガレットは愛情の対象であり、みずからの存在の十全さを与えてくれるはずのものでありながら、ほかならぬその孤独と疎外ゆえに、自己回復を求める行為が殺害という形しか取りえなかったのである。ナットが抱え込んでいた実存の闇は、かくも黒々として底深いものだったといえる。

## V

こうして見てくると、スタイロンのナット・ターナー像は文学的造形としてきわめて奥行き深いものになっており、そのことは史実の歪曲うんぬんとは別の次元で、正当に評価すべきである。そのことと関連するが、最後に、やや異なった角度から、事実とフィクション、歴史と小説という問題に今一度立ち戻ってみたい。

詳細な考察はいずれ別稿で行うこととして、ここでは方向性を提示するにとどめておくが、『告白』をポストモダンの歴史改変小説の一種とみなすことはできないであろうか。今まで見てきたように、この作品は史実のごく大きな枠組みのみは歴史から借りているが、主人公の肉付けは作者の自由な想像力に任されている。その意味ではいわゆる「歴史小説」ではなく、スタイロン自身が『告白』の「著者はしがき」で述べているように歴史についての「瞑想」とでもいうべきものであろう。そしてその「瞑想」において、スタイロンが人種差別に根ざした社会の超克を夢想する瞬間はなかっただろうか。みずからが想像した登場人物であるナット・ターナーに深く感情移入して、その実存の闇に一筋の曙光が射すことを心底願う、そうした瞬間がありはしなかっただろうか。スタイロンは作品の結末部でナットにマーガレットとの性的合一のヴィジョンを見させている。

And I think of her, the desire swells within me and I am stirred by a longing so great that like the memories of time past and long-ago voices, flowing waters, rushing winds, it seems more than my heart can abide. *Beloved, let us love one another: for love is of God; and everyone that loveth is born of God, and knoweth God.* Her voice is close, familiar, real, and for an instant I mistake the wind against my ear, a gentle gust, for her breath, and I turn to seek her in the darkness. And now beyond my fear, beyond my dread and emptiness, I feel the warmth flow into my loins and my legs tingle with desire. I tremble and I search for her face in my mind, seek her young body, yearning for her suddenly with a rage that racks me with a craving beyond pain; with tender stroking motions I pour out my love within her; pulsing flood; she arches against me, cries out, and the twain—black and white—are one. (*The Confessions* 426)

センチメンタルな空想といった側面があるのは否定できないが、スタイロンのそうした人種の障壁の超克の夢想がここには現れているように思える。つまり、結末部のこのヴィジョンはトランスエスニックな試みを象徴していると考えられるのではないか。

この結末の場面も、『応答』の論者たちの大きな反発を招いた。エスニシティの問題に絡めて言えば、そこに見られる白人と黒人の合一、同化の匂いに彼らは反発した可能性が大いにあると考えられる。公民権運動の昂揚で彼らの黒人としての自意識や誇りが大いに高まっていた時期である。戦闘的な急進派の黒人たちには兩人種の融和のヴィジョンはなまぬるい問題のすり替えとも見えたことだろう。

そもそも歴史改変小説の根底には、自動化し、固定化してしまった現実を見るまなざしに、認識の衝撃を与え、異化作用によって現実を新たな光のもとに浮かびあがらせるという意図があると考えられる。スタイロンはナット・ターナーの構想を長年あためていたうちに、はからずも歴史改変小説の方法に辿り着いたとはいえないだろうか。もともと白人作家が過去に実在した黒人奴隷の内面に迫ろうということ自体、かなり危険な文学的挑戦であり、同時にきわめてトランスエスニックな試みでもある。ポストモダンの歴史観との関連から『告白』を読み解こうとする論文もいくつか出てきている。<sup>6)</sup> こうした着想があながち荒唐無稽なものだと言いきれないのである。人種融合のヴィジョンが、逆に現実のエスニシティの状況を際立たせる。『応答』の論者たちの反発は、歴史改変小説という装置の現実的有効性をはからずも証明したといえる。

## 注

- 1) この数字は概数である。何人の黒人が反乱に参加し、何人の白人が実際に殺害されたか、といった事実関係については、正確な数字はわかっていないのが実情である。(Aptheker 53)
- 2) 『応答』所収の論評は比較的短いものが多く、また論点が重複しているところが多いので、煩雑さを避けるために引用箇所の数ではなく論者名のみを挙げておく。
- 3) 『告白』のなかに登場するグレイは、裁判の席上奴隷制擁護論を披瀝している。彼は黒人の生物学的劣等性を信じており、またナット・ターナーの反乱に対して主人の側について戦った黒人がいたことを指摘し、これが奴隷制度の正当性を証し立てている



- と主張している。さらに当時の北部のアポリショニズムは、南部の奴隷制度の実情に対する無知から生じたものだと批判している。(The Confessions 84-86, 93-95)
- 4) ナットの次のような「蠅」についての想念を参照。“In many ways, I thought a fly must be one of the most fortunate of God’s creatures. Brainless born, brainlessly seeking its sustenance from anything wet and warm, it found its brainless mate, reproduced, and died brainless, unacquainted with misery or grief. But then I asked myself: How could I be sure? Who could say that flies were not instead God’s supreme outcasts, buzzing eternally between heaven and oblivion in a pure agony of mindless twitching, forced by instinct to dine off sweat and slime and offal, their brainlessness an everlasting torment? So that even if someone, well-meaning but mistaken, wished himself out of human misery and into a fly’s estate, he would only find himself in a more monstrous hell than he had even imagined—an existence in which there was no act of will, no choice, but a blind and automatic obedience to instinct which caused him to feast endlessly and gluttonously and revoltingly upon the guts of a rotting fox or a bucket of prisoner’s slops. Surely then, that would be the ultimate damnation: to exist in the world of a fly, eating thus, without will or choice and against all desire.” (The Confessions 26-27)
- 5) Daniel Ross (1933) を参照。
- 6) Reitz および Trouard を参照。

#### 参 考 文 献

- Aptheker, Herbert. “The Event.” *Nat Turner: A Slave Rebellion in History and Memory*. Ed. Kenneth S. Greenberg. New York: Oxford Up, 2003. 45-57.
- Atkin, William E. “Toward an Impressionistic History: Pitfalls and Possibilities in William Styron’s Meditation on History.” *American Quarterly*, 21(Winter 1969): 805-812.
- Casciato, Arthur D. and James L. West III. “William Styron and The Southampton Insurrection.” *American Literature*, Vol.52, No.4 (Jan.1981): 564-577.
- Cheshire, Jr., Ardner. “The Recollective Structure of *The Confessions of Nat Turner*.” *The Southern Review*, 12 (1976): 110-121.
- Clarke, John Henrik, ed. *William Styron’s Nat Turner: Ten Black Writers Respond*. Westport, CT: Greenwood Press, 1987.
- Coale, Samuel. *William Styron Revisited*. Boston: Twayne Publishers, 1991.
- Gray, Richard. *The Literature of Memory: Modern Writers of the American South*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1977.
- Greenberg, Kenneth S, ed. *Nat Turner: A Slave Rebellion in History and Memory*. New York: Oxford Up, 2003.
- Mellard, James M. “This Unquiet Dust: The Problem of History in Styron’s *The Confessions of Nat Turner*.” *The Critical Response to William Styron*. Ed. Daniel W. Ross. Westport, CT: Greenwood Press, 1995. 157-172.
- Reitz, Bernhard. “‘Fearful ambiguities of time and history’: *The Confessions of Nat Turner* and the

- Delineation of the Past in Postmodern Historical Narrative.” *Papers on Language and Literature*, 23(1987): 465-488.
- Ross, Daniel W. “‘Things I Don’t Want to Find Out About’: The Primal Scene in *The Confessions of Nat Turner*.” *Twentieth Century Literature*, 39 (1993): 79-98.
- \_\_\_\_\_, ed. *The Critical Response to William Styron*. Westport, CT: Greenwood Press, 1995.
- Ruderman, Judith. *William Styron*. New York: Ungar, 1987.
- Styron, William. *The Confessions of Nat Turner*. New York: Random House, 1967.
- \_\_\_\_\_. *This Quiet Dust and Other Writings*. New York: Random House, 1982.
- Trouard, Dawn. “Styron’s Historical Pre-Text: Nat Turner, Sophie, and the Beginnings of a Postmodern Career.” *Papers on Language and Literature*, 23(1987): 489-497.
- Watkins, Floyd C. “*The Confessions of Nat Turner*: History and Imagination.” *The Critical Response to William Styron*. Ed. Daniel W. Ross. Westport, CT: Greenwood Press, 1995. 141-156.
- West III, James L., ed. *Conversations with William Styron*. Jackson: UP of Mississippi, 1985.
- 岩元 巖『現代のアメリカ小説——対立と模索』東京：英潮社，1974.
- 須山 静夫『神の残した黒い穴 現代アメリカ南部の小説』東京：花曜社，1978.
- 中村 紘一『アメリカ南部小説の愉しみ ウィリアム・スタイロン』京都：臨川書店，1995.
- ハッチオン，リンダ．（川口喬一訳）『ポストモダニズムの政治学』東京：法政大学出版局，1991.